

第〇章 プロローグ

夕闇が包みこむ森の中を、一筋の光が通っていく。

狼などを襲う生き物があまり出ないからといって、町からずいぶんとはなれた山道の日が暮れる頃に通る人たちはほとんどいない。

まして、森を切りひらいて造られた山道はかすかな日の光さえとどかず、真夜中になつてしまったのではと錯覚してしまうほどの暗闇があたりを包みこむ。

そんななか、木々からもれるかすかな月明かりとランタンの光をたよりに、めずらしく行商の一行が通っていく。

一行といっても荷物をぎっしり載せた馬車一台と五人と犬一匹というちいさな団体、その先頭には少女の姿がある。

背中まである栗色の髪は黄金色の飾りひもで結われている、足元には白い毛むくじやらかな大きめの犬がついてくるように歩いている。

自分たちの足音しか聞こえないほど、不気味に静まりかえった森のなかをランタンを片

手に琥珀色した瞳であたりを注意しながら前に進んでいく。

「きやつ」

小さなくぼみに足をとられておもわずよろける。袖で額をぬぐいながら態勢を立てなおし、一度ふかく深呼吸をする。

顔をあげ、前に進もうとした時に頭のうえから何かをかぶせられ、おもわず少女は小さな悲鳴をあげた。

「大丈夫か？ エレノア。ほら、森のなかは寒いんだ。これ着ろ。」

やさしく話しかける声が後ろから聞こえる。エレノアと呼ばれた少女は頭の上の布を降りしながら振りかえると体格のいい男が、いぶかしげな表情をして立っていた。

「あ、お父さん。ありがと。うん、大丈夫だよ。」

この行商の長である少女の父、キニアが気を使いコートを持ってきてくれたのだ。

日中は暑いくらいだったのに、日の暮れた森の中はひんやりとして肌寒ささえ感じる。

少女は持ってきてくれたコートをはおりながら気丈に笑顔を作つて応える。しかし、そ

の表情には言葉とはうらはらに長旅での疲労が隠しきれず、無理をしているということは父親であるキニアには痛々しいほど理解できた。

「さっきの村で休憩とればよかったんだが、次の町に着くのにこれ以上遅くなるわけにもいかんからなあ。もう少しだからがんばれるか？」

「うん、大丈夫。：お父さん、ごめんなさい。無理言つて。」

「んん、まあ、いいさ。」

今回、無理を承知で夜中に先を進むことを望んだのはキニアではなくこの少女、エレノアであった。

理由はキニアも知っている。この行商という旅中心の生活の中でできた数すくない友人に会うためなのだ。

そして、この友人の住む村はこの時期に祭りが行なわれる。それに何とか間に合わせたいと強く願っていた。だからキニアも無理にとめようとせず夜中になっても先に進むことを決めたのだった。

「明日が満月か。この様子だとウェスタの天気はよさそうだな。このまま順調に行けば儀式までには間に合いそうだな。」

「よかった。なかなか祭りにあわせてなんて行ったことないから今年はすごく楽しみにしてたの。」

さつきまでの気をはっていた表情から少女らしい笑顔にかわる。

とでもうれしそうに父親にむかって話しかける。その無邪気なようすを見てキニアも思わず微笑む。

「それに明日の儀式ノエルがはじめてするんですって。ふふっ、今頃、一生懸命練習してるんじゃないかな。」

「そうか、もうそんな歳か。そういえばおまえと同年だもんな。」

「うん。そうだよ。明日か。：。すごい楽しみ。あつ、前見て。」

エレノアは前を指さす。暗い森の先に光が見えてきたのだ。どうやら話をしているうちに森のおわりにさしかかっていたらしい。

エレノアは走って森の出口へとむかう。一足先に森をぬけたエレノアは、目の前に広がる世界を見て感嘆の声をあげる。

そこはひらけた小高い丘の上、日は完全に暮れていて空には満天の星空が広がっていた。暗い森を抜けたことから同僚のみんなからも口々に安堵の声がもれる。

「今日をあそこの村で終わりにするぞ。」

エレノアの元に追いついたキニアが、ふもとにある町灯りを指さしながらみんなに伝える。

「もうすこしだ。行くぞお、エレノア。」

夜空を眺めて立ちどまっていたエレノアにキニアが呼びかける。

「はい。」

元気に返事する。歩きだす前にエレノアはもう一度遠くをながめた。

その方角には、いまは暗くて何も見えないが、たしかに目標の村があった。そして久しぶりに会うことのできる友人の顔を思いうかべていた。

「行こう、アルフ。」

アルフが返事すると、エレノアはみんなのもとへ走りだした。

7 Ancient Memories (0)

著者 さちづる

編集 COHO

仕上 Y.Kumagai